

臨床経験や年齢が看護婦の自己評価に及ぼす影響 (Part II): 自己イメージから

著者	木村 留美子, 河田 史宝, 南家 貴美代
雑誌名	日本看護研究学会雑誌 = Journal of Japan Society of Nursing Research
巻	25
号	2
ページ	2_29-2_35
発行年	2002-01-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/45535

doi: 10.15065/jjsnr.20020203002

臨床経験や年齢が看護婦の自己評価に及ぼす影響 (Part II)

— 自己イメージから —

The Influence of Experience and Age on Nurse Self-evaluation,
in the Context of Self-image (Part II)

木 村 留美子¹⁾ 河 田 史 宝²⁾ 南 家 貴美代²⁾

Rumiko Kimura Hitomi Kawata Kimiyo Nanke

キーワード：看護婦，臨床経験，自己評価，自己イメージ
nurses, clinical experience, self-evaluation, self-image

はじめに

戦後の高度経済成長は産業構造の変化とともに、都会への集中化と農村部の過疎化をもたらした。その結果、核家族が増え少子少産、高年齢独居老人の増加などによる問題や慢性疾患、障害を抱えながら自宅で生活する人々への支援など、医療の領域にもさまざまな影響を及ぼし、多岐にわたる健康問題への対応、倫理面への配慮、看護の質の向上といったことが求められている。このことは専門職としての看護婦の意識にもさまざまな変化をもたらしている^{1・2)}。そのうちの一つに、看護の現場で働く人々の学習意欲の高揚があげられる^{3・4)}。これはまた、組織社会化の過程⁵⁾として経営主体が強力に推し進めていることでもある。このような状況の中で、人は職業人としてのキャリアを発達させ、それに伴う行動の変容を迫られている^{6・7)}。

そこで、本研究では職業人としてのキャリア発達に看護婦の体験や経験がどのように影響を及ぼしているのか、自己概念の構成要素の一つである

自己イメージについて、年代と臨床経験年数との関係から調査した。

調査方法

1. 調査内容

自己イメージについての調査項目は、Osgood, C. E.⁸⁾が考案した Semantic Differential Method (SD法)⁹⁾を用いた。項目は、井上¹⁰⁾が心理学や教育学の分野で用いパーソナリティの測定に有効であるとし、また、鹿内ら¹¹⁾が用いた31の形容詞対から30項目の形容詞対を用い表1に示した。これらの形容詞対を用いて自分自身のイメージを評定し、回答欄には、「非常によくあてはまる」「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」の4段階の評定尺度を設けた。評定尺度の配点は「どちらともいえない」の4点を中心に置き7～1点の配点を行った。したがって、得点が高いほど形容詞対の左側のイメージが強調され、得点が低いほど形容詞対の右側のイメージが強調される。

1) 金沢大学医学部保健学科 School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kanazawa University

2) 金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻看護学領域 Division of Health Science Nursing Graduate
School of Medical Sciences, Kanazawa University

表1 自己イメージの形容詞対

1. 活発な	不活発な
2. 理性的	感情的
3. 決断力のある	決断力のない
4. 親切的な	不親切的な
5. 無口	おしゃべりな
6. 繊細な	おおまかな
7. 弱い	強い
8. 真面目な	不真面目な
9. 外向的な	内向的な
10. 野暮な	おしゃれな
11. 大らかな	気持ちのこまやか
12. 野心のある	野心のある
13. 地味な	派手な
14. 家庭的な	非家庭的な
15. 頼もしい	頼りない
16. 細やかな	雑な
17. 誠実な	不誠実な
18. 楽観的な	悲観的な
19. 指導力のある	指導力のない
20. 逞しい	ひ弱な
21. 暖かい	冷たい
22. 意志強固な	意志薄弱な
23. 社交的	非社交的
24. 自主的	依存的
25. 線の太い	線の細い
26. 魅力のある	魅力のない
27. 視野の広い	視野の狭い
28. 明るい	暗い
29. 積極的	消極的
30. 優雅な	粗野な

2. 調査時期と対象

2000年10月から11月に看護研究の学習会に出席した北陸地区と関東地区の看護婦550名であり、その内有効回答数は478名(86.9%)であった。

3. 分析方法

パーソナルコンピュータに入力し、SPSS 統計パッケージ(10.0J)を使用した。自己イメージの因子構造の検討には主因子法(バリマックス)による因子分析を行った。20歳代、30歳代、40歳代以上の3群からと、5年未満、5年以上15年未満、15年以上の3群に分類された臨床経験年数から比較した。抽出されたそれぞれの因子を構成する項目の平均得点の差の検定はt-検定により行った。

4. 倫理的配慮

対象者には研究の目的と研究への協力は自由意志であることを口頭で伝え、回答は無記名とした。

結 果

1. 対象者の背景

基本統計により各年代と臨床経験年数が大きく異なるものは、はずれ値として扱い12名を除外し、466名を分析対象者とした。また、男性の参加者は466名中10名(2.1%)と少数であったため、男女を分けずに分析を行った。表2に対象者の年代

表2 対象者の年齢別臨床経験年数 n=466

年 代	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代
3年未満	103 (22.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	103 (22.1)
3年以上5年未満	98 (21.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	98 (21.0)
5年以上10年未満	61 (13.0)	31 (6.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	92 (19.7)
10年以上15年未満	0 (0.0)	47 (10.1)	3 (0.6)	1 (0.2)	51 (10.9)
15年以上	0 (0.0)	26 (5.6)	83 (17.8)	13 (2.8)	122 (26.2)
合 計	262 (56.2)	104 (22.3)	86 (18.5)	14 (3.0)	466 (100.0)

人数(%)

と臨床経験年数を示した。看護研究の学習会への参加者は20歳代が262名 (56.2%), 30歳代が104名 (22.3%), 40歳代が86名 (18.5%), 50歳代が14名 (3.0%) であり, 20歳代が最も多く, 年代が高くなると共に減少していた。また, 臨床経験年数は, 3年未満は103名 (22.1%), 3年以上5年未満は98名 (21.0%), 5年以上10年未満は92名 (19.7%), 10年以上15年未満は51名 (10.9%), 15年以上は122名 (26.2%) であり, 臨床経験年

数15年以上の参加者が最も多く, 次いで臨床経験年数3年未満の者が多かった。年代と臨床経験年数の関係は, 20歳代の全員が臨床経験年数10年未満, 30歳代は臨床経験年数5年以上から15年以上と幅広く, 40~50歳代のほとんどは臨床経験年数15年以上であった。

2. 自己イメージの因子構造

表3は, 自己イメージについて主因子法により

表3 自己イメージ尺度の因子分析 (n=466)

尺 度		第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	寄与率
自主的	— 依存的	0.745	-0.089	0.035	0.076	0.071	0.010	16.00
指導力のある	— 指導力のない	0.704	-0.062	0.132	0.113	0.205	-0.007	
頼もしい	— 頼りない	0.699	-0.152	0.196	0.170	0.131	-0.013	
決断力のある	— 決断力のない	0.658	-0.024	0.036	0.185	-0.053	-0.158	
逞しい	— ひ弱な	0.576	-0.254	0.238	-0.016	0.079	-0.050	
積極的	— 消極的な	0.556	-0.458	0.158	0.250	-0.076	-0.100	
線の太い	— 線の細い	0.555	-0.204	0.003	-0.014	-0.204	-0.079	
視野の広い	— 視野の狭い	0.535	-0.141	0.127	0.331	0.112	0.052	
活発な	— 不活発な	0.523	-0.498	0.102	0.112	-0.035	-0.039	
弱い	— 強い	-0.533	0.111	0.101	-0.011	0.175	0.213	
無口な	— おしゃべりな	-0.148	0.773	0.076	0.049	-0.038	0.186	10.54
明るい	— 暗い	0.278	-0.632	0.297	0.172	-0.191	-0.108	
外交的な	— 内向的な	0.347	-0.650	-0.004	0.267	-0.083	0.109	
社交的	— 非社交的な	0.293	-0.680	0.152	0.289	-0.105	0.125	
誠実な	— 不誠実な	0.067	0.050	0.734	0.029	0.012	0.018	9.99
親切な	— 不親切な	0.111	-0.131	0.723	0.055	0.004	0.005	
暖かい	— 冷たい	0.038	-0.234	0.721	0.074	-0.071	0.097	
家庭的な	— 非家庭的な	0.068	-0.052	0.629	0.034	0.168	-0.045	
真面目な	— 不真面目な	0.175	0.295	0.599	0.035	0.174	-0.192	
優雅な	— 粗野な	0.184	-0.042	0.196	0.658	0.135	-0.059	8.01
魅力のある	— 魅力のない	0.353	-0.224	0.246	0.500	-0.101	-0.115	
地味な	— 派手な	-0.111	0.411	0.307	-0.538	0.066	0.194	
野暮な	— おしゃれな	-0.025	0.130	-0.001	-0.728	-0.057	0.019	
繊細な	— おおまかな	0.128	0.188	0.204	0.211	0.654	0.148	6.75
細やかな	— 雑な	0.264	0.134	0.281	0.353	0.527	0.051	
楽観的な	— 悲観的な	0.407	-0.051	0.034	-0.005	-0.580	0.118	
大らかな	— 気持ちの細やかな	0.045	0.028	0.014	0.107	-0.818	0.046	
理性的	— 感情的	0.222	0.429	0.028	0.352	0.021	0.523	4.29
野心のある	— 野心のない	0.192	-0.077	-0.088	0.357	0.006	-0.565	
意志強固な	— 意志薄弱な	0.404	0.043	0.207	0.097	0.012	-0.618	
累積寄与率 (%)								55.52

因子分析 (バリマックス回転) を行い0.5以上の因子負荷量を持つ項目を採用したものである。第1因子は、「自主的」「指導力のある」「頼もしい」「決断力のある」「逞しい」「積極的」「線の太い」「視野の広い」「活発な」「強い」から「自主性」因子と命名した。第2因子は、「無口な」「暗い」「内向的な」「非社交的な」から「社交性」因子と命名した。第3因子は、「誠実な」「親切な」「暖かい」「家庭的な」「真面目な」から「受容性」因子と命名した。第4因子は、「優雅な」「魅力のある」「派手な」「おしゃれな」から「魅力的」因子と命名した。第5因子は、「繊細な」「細やかな」「悲観的な」「気持ちの細やかな」から「繊細さ」因子と命名した。第6因子は、「理性的」「野心のない」「意志薄弱な」から「理性的」因子と命名した。6因子の累積寄与率は55.52%であった。

3. 年代と自己イメージ

年齢の分布状況から年代を20歳代262名 (56.2%), 30歳代104名 (22.3%), 40歳代以上100名 (21.5%) の3群に分け、年代別に、自己イメージの6因子のそれぞれを構成する項目の得点を算出し、一元配置分散分析により3群の因子の平均得点を比較した。その結果、「受容性」因子に有意差を認めた ($F(2, 463) = 3.908, p < 0.05$)。自己イメージの6因子のそれぞれを構成する項目の平均得点を年代別に図1に示した。平均得点が高いほどその因子の表す傾向が強いことを示している。「自主性」「魅力的」「繊細さ」因子は40歳代以上の者の平均得点が高かったが、t検定の結果有意差は認めなかった。「社交性」因子は20歳代の者の平均得点が高かったがt検定の結果有意差は認めなかった。「理性的」因子は年代による相違は認めなかった。「受容性」因子は、20歳代と40歳代以上との間に有意差を認め、40歳代以上の者が有意に高かった ($t = 2.77, df = 360, p < 0.05$)。

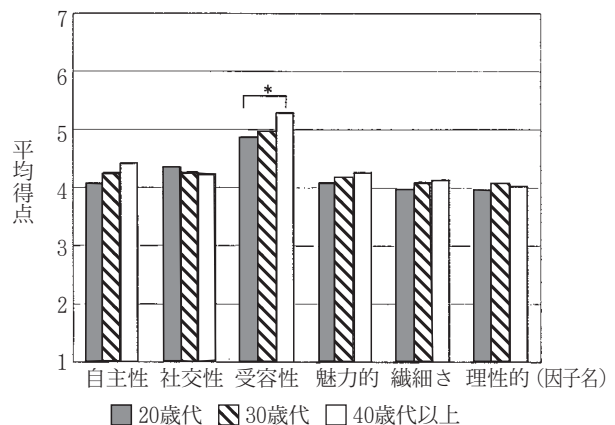


図1 年代別自己イメージ因子得点の比較

4. 臨床経験年数と自己イメージ

人数の割合や年代との重なりを考慮し、臨床経験年数を5年未満 (43.1%), 5年以上15年未満 (30.7%), 15年以上 (26.2%) の3群に分類し、これにもとづいて自己イメージの6因子のそれぞれを構成する項目の平均得点を算出した。3群の因子の平均得点は一元配置分散分析により行った。その結果、「受容性」因子に有意差を認めた ($F(2, 463) = 3.891, p < 0.05$)。自己イメージの6因子のそれぞれを構成する項目の平均得点を臨床経験年数別に図2に示した。平均得点が高いほどその因子の表す傾向が強いことを示している。「自主性」「魅力的」「繊細さ」因子は、臨床経験年数15年以上の者の平均得点が高かったが有意差は認められなかった。「社交性」因子は臨床経験年

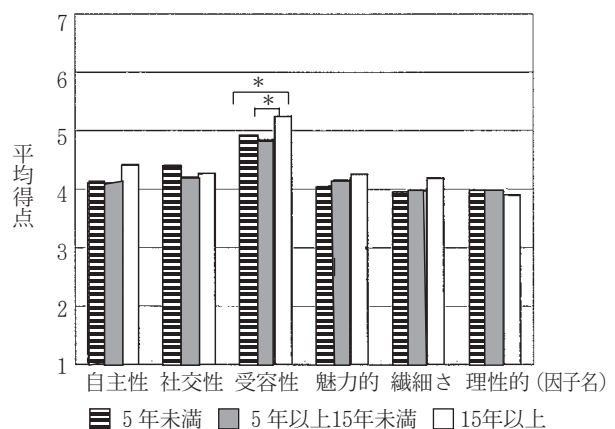


図2 経験年数別自己イメージ因子平均得点の比較

数5年未満の者の平均得点が高かったが有意差は認められなかった。「理性的」因子は臨床経験年数による相違は認められなかった。「受容性」因子は臨床経験年数15年以上の平均得点が最も高く、15年以上の者は5年未満 ($t=2.31$, $df=321$, $P<0.05$) および5年以上15年未満 ($t=2.64$, $df=263$, $P<0.05$) との間に有意差を認め、15年以上の臨床経験者の得点が有意に高かった。

考 察

学習会への参加者は年代では20歳代が最も多く、年代が高くなるとともに減少していた。臨床経験年数では、15年以上が最も多く、次いで3年未満であった(表2)。20歳代に参加者が多いことは、若い年代に対しても調査研究の能力が求められ、また自らの欲求もあり¹⁾、さらに学生時代に学習した研究方法論を再度学習し、臨床の現場で活かしたいとの思い⁴⁾があるものと考えられる。さらに、医療の高度化や多様な健康問題を有する患者への質の高い看護活動など、急激な社会の変化に応じた専門的知識や技術を応用する力をつけ、専門性を高めていく方法の一つとして研究能力を高めることの必要性に対する周囲の期待も大きいものと考えられる¹²⁾。また、臨床経験年数15年以上の参加者が多いことについては、彼らの多くが中間管理職や指導的・教育的役割を担い、経験の短い者からの相談を受ける機会が増加¹³⁾するなど、職務上の要求や解決すべき課題も多く、これらの課題を解決するための一つの方法として、研究能力を高める必要性が生じて参加していることが考えられる。

看護婦としての自己イメージは、「自主性」「社交性」「受容性」「魅力的」「繊細さ」「理性的」の6因子が抽出された(表3)。看護婦は医療サービスを提供する専門職として、チームを組んで仕事を遂行し、患者やその家族と対峙し、刻々と変化する患者の状況に対して適切に看護業務を実施

することが求められている。そのためには冷静に理論的に、かつ主体的に必要な判断を行い、他のスタッフと協働しながらも自主的に行動することが要求される。また、患者の話をじっくり聞き、患者や家族の立場に立って話をする細やかな配慮ある対人関係を取るための技術も身に付け^{14)・15)}、看護活動をおこなっていく必要がある。本研究で看護婦としての自己イメージとして抽出された6因子は、このように理論的知識と経験的知識を統合し看護活動を行っていくのに必要な因子であると考えられる。この因子の中でも特に、「受容性」因子は、40歳代以上の者の得点が高く、臨床経験では15年以上の者の得点が高かった。つまり、患者の話をじっくり聞き、患者がどのようなことに心を痛めているか、また家族の思いなどへも配慮した受容的な対応ができる姿勢は、看護において基本的な援助技術ではあるが、患者の個性の尊重やその時々の場合の状況を判断しながら対応しなければならないといったことは経験を積み上げ、幅広い体験をした年齢の高い看護婦の方により深く体得されているものと考えられる。一方、経験の浅い看護婦は、職務内容に慣れ職場の良好な人間関係を構築する^{16)・17)}ために、まず対象の理解や対人関係を作り上げること¹⁸⁾や医療チーム内の相互理解や信頼関係の構築のために¹⁹⁾注意が払われ、患者に対して受容的な関係を構築するまでにはまだ時間を要することが考えられた。しかし、他の5因子に比べて「受容性」因子は、全ての年代、臨床経験年数で平均得点が最も高く示されたことは、日ごろから看護婦として看護活動の中で常にこのことを意識して患者や家族に接していることの表れと考えられる。

ま と め

以上、述べたように、年代や臨床経験年数によって明らかな相違が認められた自己イメージの因子は、「受容性」因子のみであった。このイメージ

は、看護婦として患者との関係の中で支持的、共感的に関わる職務経験により形成されることが明らかであった。また、「自主性」「社交性」「魅力的」「繊細さ」「理性的」の自己イメージは医療サービスを提供する専門職業人に必要な因子として、職業適性を示す自己イメージが形成されていたと考えられる。このような傾向は専門職業人となるための専門教育の影響も大きく関与し、すでに看護学生のときから他専攻の学生よりも強く意識さ

れており^{20・21)}、就業後もこのような傾向は引き継がれて行くことが本研究からも明らかとなった。Super²²⁾は職業心理学の中において自己概念と職業活動とが相互に影響し合う中で個人の職業上の発展としてのキャリア発達となされ、それがまた個人の適応を推し進めるとしており、これらのことが職業人としての自己イメージにも影響を与えていることがわかった。

要 旨

本研究では看護婦の経験がどのように専門職業人の意識に影響を及ぼしているのか、自己概念の一つである自己イメージについて臨床経験年数と年代の関係から調査した。

学習会への参加者は年代別には20歳代(21.1%)が最も多く、臨床経験年数別では臨床経験年数15年以上が最も多かった。自己イメージは「自主性」「社交性」「受容性」「魅力的」「繊細さ」「理性的」の6因子が示された。年代別および臨床経験年数別の比較において、「受容性」因子に有意差を認め、高年齢群で高く、臨床経験年数15年以上に高くなっていた。

Abstract

A study on the influence of clinical experience on nurse career development, as viewed from the self-evaluation of ability, and in the context of self-image.

Subjects who participated in this study ranged in age from their 20's (21.1%) to their 50's, most of them having experience of more than 15 years.

Six factors were extracted from factor analytic studies of self-image. The factors were: independence, sociability, receptiveness, competence, sensitivity, and rational.

Based on comparison of the age groups and the number of years of clinical experience, the receptiveness factor showed a significant difference. The factor showed higher scores for both the older age group, and for those with more than 15years of clinical experience.

引用・参考文献

- 1) 日本看護協会：日本看護協会調査研究報告，1997年看護職員実態調査No54，63－68，196－199，1999
- 2) 菊地昭江，原田唯司：看護専門職における自律に関する研究，看護研究Vol. 30，No4，23－34，1997

- 3) 齊藤千代，飯豊祥子他：経験年数別階層区分に基づく看護職の現実的課題と展望，第21回日本看護学会論文集，看護管理，156－162，1990
- 4) 杉下知子，交野好子：臨床看護者が看護研究に取り組む姿勢，看護展望，Vol. 19，No.745－52，1994
- 5) 若林 満 他：キャリア発達と職業自己像－女

- 性専門職の場合－, 名古屋大学教育学部紀要, 29:137－155, 1982
- 6) Graen, G. B.: Role-making processes within complex organizations. In M.D. Dunnette (ed.), Handbook of industrial and organizational psychology. Chicago: Rand McNally, 1976
- 7) Wanous, J.P.: Organizational entry: Recruitment, selection, and socialization of newcomers. Reading Mass.: Addison-Wesley, 1980
- 8) Osgood, C, E, and et al.: The Measurement of Meaning Univ. of Illinois' s Press. Urbana, 1957
- 9) 岩下豊彦: SD 法によるイメージの測定. その理解と実施の手引き, 川島書店, 1983
- 10) 井上正明・小林利宣: 評価技法としてのSD法の意義とその用い方(その2)－形容詞対の尺度構成の方法－, 指導と評価, 31(10): 41－44, 1985
- 11) 鹿内啓子他: 女子大生の社会的・職業的役割意識の形成過程に関する研究－性役割タイプと自己能力を中心として－, 名古屋大学教育学部紀要, 29: 101－136, 1982
- 12) 日本看護協会: 日本看護協会調査研究報告, 1997年看護職員実態調査No54, 63－68, 192－195, 1999
- 13) 大隅悦子, 西田直子他: 京都市内の国公立病院における看護研究活動の現状－活動状況および環境条件を中心に－, 第30回日本看護学会論文集, 看護管理, 119－121, 1999.
- 14) 石渡祥子, 臼井洋子他: 20代ナースの経年別にみるキャリア形成過程(その3) 第28回日本看護学会論文集, 看護管理, 233－236, 1997
- 15) 田淵康子, 岡本久美他: 新人看護の人間関係に関する調査, 第28回日本看護学会論文集, 看護管理, 113－115, 1997
- 16) 柳沢悦子: 看護実践能力の獲得に関する研究(その2), 日本看護科学会誌 Vol. 14, 3, 360－361, 1994
- 17) 池内佳子, 阿曾洋子他: 新卒看護婦の就職5年間における自立過程から見た継続教育の検討, 看護展望 Vol.25, No 5, 26－37, 2000
- 18) 本田多美江: 『看護の専門的能力』の視点からみた院内教育ニーズの分析－N系病院における看護婦の調査から－. 日本看護科学会誌, 20(2): 29－38, 2000
- 19) 菊池昭江: 看護専門職における自律性と職場環境および職務意識との関連－臨床経験年数ごとにみた比較. 看護研究, 32(2) 92－103, 1999
- 20) 若林 満, 後藤宗理他: 職業レディネスと職業選択の構造－保育系, 看護系, 人文短大生における自己概念と職業意識との関連－. 名古屋大学教育学部紀要, 30: 63－98, 1983
- 21) 木村留美子, 和田丈子 他: 現在の Attachment である Internal Working Model (IWM) と職業指向の関係について. 母性衛生, 41(1): 11－15, 2000
- 22) Super, D, E. : The psychology of careers. New York : Harper. 1957. 日本職業訓練協会訳: 職業生活の心理学. 誠心書房. 1960

〔平成13年11月5日受付〕
〔平成14年2月3日採用決定〕